

1953年頃のモンゴル語科の情況と小沢先生  
The Situation of Mongolian Department in around 1953  
and Professor Shigeo Ozawa

田 中 克 彦

(一橋大学名誉教授)

TANAKA Katsuhiko

(Professor Emeritus, Hitotsubashi University)

ぼくが東京外語蒙古語学科に入ったのは1953年(昭和28年)のことで、17歳だった。小沢先生は1926年の生まれだから、8歳のちがいで、まだ26歳の若さだった。外語から東大にすすみ、言語学を卒業されたのが51年だから、それからまだ2年しかたっていない、ほやほやだった。だから、大学で学ばれたそのままの気分がまだ抜けない、文字通りの学徒のままの様子だった。当時モンゴル科のスタッフは教授の小島武男教授(「蒙古語文典」1938年、第2版1941年文求堂の著作あり)、坂本忠教授、小沢助手、それに外人教師セバクドルジの4人だった。

学生といえば4年生が1人か2人、3年生がゼロ、2年生が2人だった。そして、私たち新入の1年生は6人だったが、うち2人は一学期にやめて、残ったのは4人だった。しかし久しぶりに多数の新入生を迎えて、先生たちは、久々に収穫が多かったという気分満ちて、活気を感じておられたと思う。当時モンゴル科の定員は1学年20人だったから、いかに人気のない学科だったかわかる。この20人という定員枠は、戦争中の枠がそのまま保持されたものだ。入学者がゼロだからといって、受験者が全くなかったわけではない。聞いたところでは、60人くらいは受けるが、合格がないということだった。4年生になっていたのか、卒業したのかわからないが、時々学校に姿をあらわしては、田中君、まだ浪人もしてない君がこんなところに入るのもったいないよと心からぼくに忠告する人がいた。この人は牛込若松町の税務署の職員寮に住んでいて、ぼくは、よくさそわれてそこに行き、ときには泊めてもらったように思う。めんどろ見のよい人で、さきにあげた小島先生の「蒙古語文典」のとびらのところを開くと、「贈 向学に燃ゆる田中克彦君 市川貞夫」とサインがある。市川さんがぼくにゆずってくれたものだ。この人は生きだったぼくにいつも親切で、最初の夏休みには、豊島税務署にアルバイトの世話をしてくれた。夏休み中ぼくはこの税務署にあたたかく迎えられ、一番楽な仕事だからと過誤納還付係に割りあてられた。とりすぎた税金を返す係で、ぼくはその返す係の人のそばに座って、にこにこしているだけでよかった。税務署が終わるとすぐに代々木に行き、夜は日ソ親善協会のやるロシア語の講習会に出た。まことに充実した学生生活のはじま

りだった。

ある日、木下宇陀児という作家がやってきた。当時NHKの「二十の扉」に出ていたから知っていたのだが、「日本近代文学大事典」(講談社)によると、この番組のレギュラー・メンバーを12年間つとめたという。そのうちに市川さんの消息は絶えてしまったが、たいへん世話になったくせに、ぼくは時々なまいきにふるまい、いつも市川さんをあきれさせ、怒らせて、全く反省しなかったのである。

3人の先生たちには、それぞれに性格があり、小島先生は、おもに中国語を教えられた。先生は温厚な方で、わかりやすく、ていねいで、いい授業だったと思うが、ぼくはモンゴル語を学ぶために入学したのに、これじゃ困ると思ったから、何回かめの授業に手をあげて、「先生はなぜ中国語(当時は支那語とも言っていた)を教えるんですか。モンゴル語はできないのですか」と言ったものだから、小島先生は、ややあって、「田中君、君はことばが過ぎる」とたしなめられたものだった。モンゴル語の学生は、小島先生の薫陶あって、立派な中国語の知識を身につけて、いい就職にありつけたことを思うと、ぼくはたしかに心ない発言をしてしまったことになる。さらに言えば、あのときちゃんと中国語を身につけておけば、ぼくの研究にも、それだけの利益があったはずだ。坂本先生も小沢先生もそれぞれに立派な中国語の知識を身につけておられたことを思うと、ぼくはモンゴル科のよき伝統をこわしてしまったことになる。

1953年といえ、まだモンゴルから一枚の新聞も来ず、その断片すらも入ってこない状態で、新刊書など、見ることはおろか触れる機会すらなかった。教材もないのに授業をやるなどということはあり得ないことだった。だから、その代わりに中国語をやるというのは、やむを得ない解決法だった。

現代モンゴルの文芸書を最初に手にしたのは、1957年に作家のダムディンスレンが「原水爆禁止世界大会」で日本を訪れたときに、サインしてもらって受けとったのが最初であった。

こうしたモンゴルとのなまの接触到に積極的に加わられたのが坂本先生だったが、先生はモンゴルとの交流にそれほど熱狂的というわけではなく、静かに様子を観察しておられるといったふうであった。

さて、小沢先生の話にもどろう。小沢先生が当時熱中しておられたのは、東大の言語学科での卒業論文「アルタン・トブチ」でやり残した比較校訂を行う作業だったと思う。それが終わると、モンゴル語で書かれた最古の文献である「元朝秘史」の研究に移られ、それが先生の生涯の研究課題となった。一般に研究者というものは、新入の学生に対してそのような専門的なこまかいことをじかに話しても、何の興味も引かないと知っているから、そういうことは話題にせず、ひたすらモンゴル語の授業をすればいいというわけで、授業はいわば営業用の外向きの顔でしかない。

しかし先生の授業の最初の話は、モンゴル語の辞書や基本文献についての説明で、それらは古書店でどのようにさがしたらいいかという、入手方法も加えたモンゴル語基本文献案内であった。その話しぶりはアカデミックで、この先生は学問をやっているんだとぼくは感心した。これは最初の授業の話で出てきたのか、その後のことであったかはおぼえていないが、Johanes Benzingという人の *Einführung in das Studium der altaischen Philologie und der Turkologie*, Otto Harrassowitz, 1953 (ベン

ツィング「アルタイ文献学とトルコ学研究入門」)を、丸善に注文して1956年に買った。それより数か月先に買ったのが、Nikalaus Poppe, Khalkha-Mongolische Grammatik, Franz Steiner Verlag 1951 (ニコラウス・ポッペ「ハルハ・モンゴル語文法」)。

これらのドイツ語本は先生がすすめられたのかもしれないが、この先生に何とか追いつこうという一心で、先生が大切そうに口に出す本はすべて自分で丸善に注文して買ったものだ。言語学のゼミナール担当の徳永康元先生も言及されるのはドイツ語の書物ばかりだったから、ドイツ語からは二重の圧力のもとにあった。このようにして、身辺に置いておき、ときどき参照するというのではなく、実際に先生と2人で首っぴきで読んだ論文があった。ある日、「田中君、今年はラムステッドを読んでみようか。やるかい？」と言われ、ほくも勇んで応じたところ、2人だけで読んだのが、Gustav J. Ramstedt, Das schriftmongolische und die Urgamundart, Helsinki 1903 (モンゴル文語とウルガ方言)であった。ほくは「ウルガムンダルト」と読んだら、先生は「ウルガムント・アルト」と読まれたのをすごいなあと思い、それ以来忘れずにおぼえている。

ラムステッドの生まれは1873年であった。かれの旅日記によれば1898年、すなわち25歳のとき、妻と、生まれて数か月の娘とともに始めて、シベリアからモンゴルへの旅をして、ウルガ方言の研究を行い、その成果を30歳のときに発表した論文である。ウルガ方言とはウランバートルのモンゴル語のことで、これを基礎に現代モンゴル語が作られたのである。つまり、いまのモンゴル語のことである。それと文語との対応を考えた論文で、いまの正書法を考える上でも大切な論文である。先生はこれを読むために、研究室の机のそばにドイツ語の冠詞の変化表を貼っておき、いちいち、解釈の正確を期された。ほくは図書館をさがしてみると、ありがたいことに、Rudnevのロシア語訳があった。ほくはその頃ロシア語のほうがまだ読みやすかったから、ルードネフのこの訳書の助けをかりて理解に達し、小沢先生となんとか一緒に読みすすむことができた。今から考えると、ほくらの学生時代は、先生と学生のつき合いがこのように濃密で夢のような話であった。

外語の先生たちは皆よく飲んだ。新宿に三日月という飲み屋があって、英語の小川芳男先生とか、タイ語の河部先生たちの根城であり、モンゴル科の先生は主に巢鴨で、そして時には大塚の江戸一で飲んでた。小沢先生は決して慣れた飲み手ではなかったけれども、坂本先生が強かったから、その向こうを張ってであろう、かなり無理飲みして、しょっちゅう悪酔いして道で倒れたりしたということを、さきほどの市川さんなどからよく聞いた。小沢先生は、自分は安酒でいいけれど、田中君はだいたい人だから、いい酒をやってくれよと、店のおかみに特別注文されることが多かった。考えてみるとほくは18か19歳で、まだ未成年だったが、世の中は、いまよりはるかに自由で、そんなことを問題にする人はいなかった。

先生はまだ独身で、2人で酔っ払うと、十条にある先生のお宅に行き、ふとんを二つ並べて敷いてもらって寝た。そういうことが何度もあった。先生はご両親と一緒に暮らしで、ほくはだいたい客として扱っていただいたのだ。

さきほど書いた税務署づとめと、それに続く代々木であったロシア語の授業というすき間のない、無駄のない充実した生活がたたって病気になり、ほくは2か月ほど、郷里の但馬に帰って療養につとめた。そのとき、先生に服部四郎の「音声学」を送ってほしいと頼んだところ、先生からすぐに送っていただいたので、日々それを読んで過ごした。その「音声学」はまだほくの書棚の一番目につくと

ころにある。

こうしたほくと先生との濃密な関係がうすれていったのは、ほくが2年になった頃であろうか。先生はその頃突然山登りに熱中されるようになった。山の魅力はそれほど強いものかと単純に思っていたのだが、考えてみれば山はひとりだけであるものではない。山には登る仲間があり、その中には女性もいる。人づてに聞くと、女性の強力な力で先生を引きつけたのがイタリア語の栗田さんという女子学生で、これが後に先生の奥様となられた女性であるという。ほくはこの人に一度ほど会ったことがあるかもしれないが、はっきりとはおぼえていない。当時、大学はいまよりはるかに自由だと言ったが、大学の教師と、その学生の結婚にはうるさいところがあったらしい。先生にはそれなりの苦勞があったと思う。上司にあたる小島先生に注意されてか、よく相談しておられたようだ。しかしめでたく結婚された。ところが、この山からあと、とりわけ結婚後は、先生とはまったく疎遠になってしまった。小沢先生をほくから奪ったのはヤマとオンナだったのだ。

1957年に外語を卒業すると、ほくは言語学研究室副手として、1時間30円の手当をもらって徳永先生に師事して1年を過ごし、1958年に一橋の大学院に進んだ。大学院の博士課程が終わる頃、ほくは村山七郎先生のすすめで来日中のボン大学の教授、W. ハイシヒに会って、そのすすめでボン大学に留学することになった。ところが1963年から外語モンゴル科の講師に採用することになったから、留学はやめると小沢先生から言われた。ほくは、いや、両方ともあきらめませんと宣言した。つまり外語に就職すると同時に外国留学にスタッフを出すような、そんな余裕は当時の外語にはなかったのである。

ところが、ちょうど都合のいいことに、ほくに留学の費用を出すフンボルト財団は、年にとって50にもなった先生たちが順番を待っているのだから、若いあんたはもう1年間ドイツに行くのを遅らせてほしいと言われ、ほくも外語にとにかく1年つとめてからドイツに行くことになった。こうして外語にも義理がたった。ドイツに行ってから、1年だけで帰るのが惜しくなり、ほくはせっかくの留学だからとさらに1年のばし、都合2年間外語を留守にすることになった。その間授業の負担のほとんどが小沢先生にかかっていたことはまちがいない。

この小沢先生への不義理はさらに重なることになった。外語に9年つとめてから10年目の1972年にはほくは岡山大学の江実(ごう・みのる)教授から、自分の後任に来てくれと強さそわれ、結局それを引きうけたのである。くわしいことはほくの「自伝」にゆずる。

岡山のつとめは4年で終わった。一橋大学のほくの先生が定年で退官され、ほくはその後釜にすわることになった。当時モンゴル研究者がいる大学院は一橋大学だけだったから、二木博史、栗林均など、かつて外語で教えた人たちや、モンゴル人がたくさんやってきた。

ほくは小沢先生が最晩年になっても、元朝秘史の講読をご自宅でおやりだと聞いて、そのような機会にほくも一度出席して、これまでの非礼をおわびしたいと考えていたが、ついにその機会を逸してしまった。しかしそのしばらく前に先生は、今日は君に会いたくてやってきたんだよと、何かの会に無理をおして出席された旨をうかがって嬉しかった。そのとき、多くを語ることはできなかったことが、いくぶん心残りだが、語ることはそれほど重要でなかったように思う。

先生から受けた学恩は以上のことにとどまらない。いろいろな知り合いの先生や同僚やらを紹介していただいた。先生と同じく蒙古語科出身の金岡秀友さんからは、東洋大学に通ってチベット語

の般若心経を習った。蒙古語科の一年下の竹内和夫さんからは、ご自宅に通って、ウズベク語、ウイグル語などを読む練習をした。最も驚いたのは、先生に連れられて、当時慶応で中国語を教えておられた神谷衡平先生のご自宅にうかがったときのことだ。神谷先生は当時手に入らなかったシュミットのモンゴル語辞典を筆写しておられた。小沢先生のまわりには、というよりモンゴル研究には、当時いろんな学徒が群れつどっていたのである。